ガシュアード王国
にこにこ商店街

ミリア
ブラキオの姪。何事にも一生懸命な美少女。
モリモト
グレン神殿の巫。
数年前王都に現れた謎の男。
ベキオ
ブラキオの息子。
音楽を愛する美青年。
ガルド
ブラキオの弟で、傭兵稼業の大男。
ブラキオ
エテルナ神殿の神官長。
真面目で信仰心が篤い。
シュルムト
都護軍に所属する貴族。
フェロモンだだ漏れの色男で、桜子に対して尊大な態度を取る。
ウルラド
宰相の息子。文武両道の美青年だが、桜子を崇拝するあまりストーカー紛いの行動を取る。
ミホ
ブドウ園の息子。
桜子と気の合う好青年。
槇田桜子
デパートに勤める23歳のOL。仕事中、後輩である瀬尾と一緒にガシュアード王国へトリップしてしまう。ブラキオに「女神の巫女」と誤解され、エテルナ神殿で生活することになるが、あまりの貧困っぷりに打開策を考えることに。
瀬尾一蔵
桜子と共にトリップした、デパート社員。何事にも無気力で、いつも桜子からお小言を食らっていたが、ガシュアード王国に来てから少しずつ変化を見せる。
登場人物紹介

第一章　槇田桜子の憂鬱

槇田桜子の人生は、ある男との出会いによって大きく、かつ劇的に変わった。

――『孫子に学ぶ人材育成術』『叱らず伸ばせ！　はじめて部下を持つ上司が読むべき本』『山本五十六に学ぶ人の育て方』『部下を育てるマジックワード』『ハッピーコーチング入門』――

桜子は、駅ビルの四階にある書店の実用書コーナーで、本の背表紙の文字を眺めていた。濃い睫に縁どられた大きな目だけを動かし、じっくりと選ぶ。

桜子は、北海道の旭川の出身だ。

高校卒業後は札幌の国立大学に進学し、東京銀座が本社の大國百貨店に就職した。この百貨店は五年後に札幌への新規出店を計画しており、地元出身の学生を求めていた。桜子はいずれ北海道に戻る予定で、東京での社会人生活をスタートさせた。

憂鬱な電車通勤に、地下迷宮のような駅。じっとりとまとわりつく暑さと、デパートの中の冷え冷えする空調にも、二年目で少しだけ慣れた。

酒の席で軽い愚痴をもらし合ったり、帰り道のコンビニでちょっと豪華なスイーツを買ってテン

ションを上げたりと、憂さの晴らし方も覚えた。時折実家に電話を入れて、母親と心配性な義理の父親を安心させることも忘れなかった。
「あ、いたいた。お待たせー」
声をかけられ、桜子は目線を棚から外した。
笑顔で手を振りながら近づいてきたのは、待ち合わせの相手である大学の同期、野原雪菜だ。就職先が同じく都内だったこともあって、今でも連絡を取り合っている。
「……桜子。今、すっごい顔してたよ」
雪菜はシンプルなベージュのネイルで、自身の眉間を示した。
桜子も倣って自分の眉間に指の腹を当て、シワを伸ばすように軽くさする。
「ごめんごめん。なんでもないよ。大丈夫」
「ならいいけど。じゃ、行こう」
「あ、ちょっと待って、雪菜。この本買ってからでいい？」
そう言って桜子は、見繕っておいた本に次々と手を伸ばす。
「いいけど――それ、全部買うの？」
「うん」
計五冊の本を両手に抱え、桜子はレジへと向かった。

今日の女子会の会場は、駅ビルの最上階にあるダイニングバーだ。

ヘルシーでボリューミーな料理が人気の店だ。一ヵ月前に予約して取った夜景の見える席に座り、いそいそとメニュー表を広げる。
「なににする？」
「私は……」
桜子は、カクテルの写真の横に書かれた、ビタミンなどの栄養成分や『美肌効果バツグン！』といったコピーを真剣にチェックした。そして『ストレスと闘うアナタへ！』という一文を発見するや否や、その見た目も成分も確認せずに、「これにする」と即決する。
やがて桜子の前に鮮やかな緑色をした謎のカクテルが、雪菜の前にピンク色のカクテルが置かれる。乾杯をしたあと、雪菜は「なにかあった？」と桜子に尋ねた。
「うん。……ちょっと」
「まさか、あの元カレ？」
「ううん。違う。そっちはもうなんともないよ」
桜子は大袈裟なくらいに手を横に振って否定する。
「そういえば雪菜こそ、この間電話でいろいろ大変だって言ってたバイトの子、大丈夫なの？」
雪菜の職場は広告代理店だ。日々の激務もさることながら、入れ替わりの激しいバイトの教育に関する悩みは尽きないらしい。
「もう辞めたよ。ほんっと仕事できないくせに、私のこと陰でなんて呼んでたかわかる？　『ババア』だよ？　二十四歳の私が！　ハタチの子に！　ほんと辞めてくれてせいせいした」

桜子はビタミンがたっぷりと入っていそうな青臭いカクテルを一口飲み、小さくため息をつく。
「あのね、雪菜。実は、私も今ちょっと悩んでるんだ。聞いてもらっていい？」
「いいよ。この間はずいぶん愚痴につき合ってもらったし。お互い様」
五穀米のサラダちらしに、コラーゲンたっぷりのフカヒレのスープをそれぞれの皿に取り分けたのを機に、桜子は口を開いた。
「実は――」

桜子は、本店配属から半年でミッシー・ミセスのフロア担当になった。仕事は順調で、入社二年目になると、出店に向けて準備の進む札幌店のフロアチーフ候補に名前が挙がるほどだった。そう、なにも問題などなかったのだ。――その時までは。
「初めて新人の教育係を任されたの。それが、取引先の社長の息子で……」
「御曹司？　なにそれ。ロマンスの予感がするんだけど！」
「引きこもり歴五年で、社会人経験ゼロの二十五歳。親のコネ入社だよ」
雪菜の瞳が一瞬で輝きを失う。その気持ちはよく理解できた。四ヵ月前に自分もほぼ同じ反応をしたからだ。
「歓迎会で一言も喋らなかった上に、開始二十分でフェードアウトして……しかも、次の日からデスクの上になんかのボトルキャップ並べ始めて――」
『仕事への意欲はゼロです』と宣言するかのような彼のデスクが、脳裏にまざまざと蘇る。彼――

瀬尾一蔵のデスクにわけのわからないものが増えていくにつれ、桜子のデスクには自己啓発本が増えていった。
「三日に一回は遅刻してくるし、挨拶はしないし、返事もしないし、いっつもスマホいじってるし、仕事しないし、電話も取らないし、常識ないし、接客研修Ｅマイナス判定だし、なにがあろうと定時に帰るし――とにかく、サイアクなの」
桜子は緑色のカクテルをぐいっと飲み干した。底に沈んでいた濃い緑色の繊維の澱が、強烈に苦く、思わず眉間にシワが寄る。
「次の頼む？」
雪菜が差し出したメニュー表を、礼を言って手に取る。次は眉間のシワに効く、美肌効果のあるカクテルにしようと思った。

斯様に桜子は、瀬尾一蔵の教育係になってからの四ヵ月、非常に強いストレスを感じ続けていた。
瀬尾は接客研修の段階で「フロアには出せない」と判断され、一日中事務所か倉庫かにいる。
大國本店では各フロアの事務所に届いた荷物は、すぐにフロアごとの倉庫へ運ぶことになっている。だが、瀬尾にその運搬を頼むと、まず戻ってこない。
桜子は複数の社員から、『倉庫でゲームやってましたよ』と十数回は聞いている。あまりにも度重なる伝説的な所業の数々から、瀬尾は陰で『レジェンド』と呼ばれているそうだ。ならば自分の立場は、さしずめ伝説の生き証人といったところだろう。

そんな桜子の心の支えは、まもなく始まるクリスマス商戦だった。
館内の飾りつけはラッピング作業と呼ばれている。ミッシー・ミセスフロアの今年のクリスマス担当は桜子で、モールやツリーの発注や当日の作業分担シート作成といった準備を、夏の終わりから進めてきた。
ラッピングの入れ替えは、通常業務の終了後、社員総出で行う作業だ。当然、事前に連絡済みである。
だが、そこは瀬尾のこと。彼が無言のままにさっさとカバンを手にした瞬間を、桜子は見逃さなかった。大学の演劇部で『能面スマイル』と恐れられた笑顔で、「瀬尾くん」と声をかける。
のっぺりとして感情の見えない瀬尾の顔が、桜子は苦手だ。特に、腹の中ではさぞかし自分を小バカにしていそうな細い目が好きではない。
ヒョロヒョロしているので制服の布がやけに余っている上、なで肩と猫背のせいで、それが更に目立つ。桜子はそれも好きではなかった。
「瀬尾くん。今日、ラッピングの入れ替えだって、伝えてあったよね？」
「そうでしたっけ」
「そうです。今のうちに段ボール、フロアに出しておいてね」
不毛な応酬を打ち切り、桜子は即座に指示を出した。
「なんの段ボールですか」
「なんのって……ラッピング用品だよ。クリスマスの。一週間くらい前に届いてたでしょ？　瀬尾

くんが倉庫に運んだんじゃない」
「忘れました」
「……探しておいてよ」
瀬尾は「たぶんないと思いますけど」と不吉なことを言って背を向けた。
このまま瀬尾を野放しにしては、またゲームでも始めかねない。そうなると他のスタッフたちが作業を開始するのが遅くなり、当然帰りも遅くなる。腕時計を見れば、すでに八時半を回っていた。
「私も探す」
桜子は、今のうちに済ましておきたかった作業を諦めて、瀬尾を追い越し倉庫へと向かった。

倉庫の重いドアを開けると、人感センサーが働いて電気がついた。
自分の背丈の倍はある棚を見回しながら、桜子は肩より少し長くなった艶のある黒髪を、手で束ねてねじり上げる。そして、胸ポケットに挿していたバナナクリップで素早く留めた。
「急がないと……」
すぐに見つかるだろうと思っていたが、段ボールの数は想像以上に多かった。しかも日付ごとに並んでいるはずの棚にも、その横に乱雑に積まれた山にも、まったく秩序というものがない。こんな状態を作ったのは、最近倉庫へ段ボールを運び続けている男に違いない。
ややしばらくして、瀬尾が入ってきた。事務所から二十秒もあれば着くはずの廊下を、どう歩け

ば何分もの時間がかかるのか、桜子にはまったく理解できない。
「瀬尾くん。置いた場所に心当たりないの？」
「ないです。毎日なにかしら運んでますし」
ごく緩慢な動作で段ボールを触りながら、瀬尾は「いちいち覚えてないんです」と言った。
怒ったら負けだ。人を変えようとしてはいけない。
自分が変われば人も変わる。――自己啓発本のフレーズが桜子の頭を過る。カッとして怒鳴ってしまいそうになったが、深呼吸をしながら言葉を呑み込む。
「とにかく、探して」
桜子は、今まで以上のスピードで段ボールの宛名をチェックした。時間がない。なにより全館のどこよりも早く帰れるように、と考えに考え抜いた作業分担の段取りを崩したくない。眉間のシワに構う余裕もなく、必死で手を動かす。
「あ。これ、なんですかね」
突然、瀬尾が彼にしては割合大きな声を出した。
「『これ』ってどれ」
「これです」
脚立に上って棚を調べていた桜子は、ガシャガシャと音を立てながら脚立を下り、瀬尾がいう『これ』の近くまで行く。段ボールの砦の向こうの壁際に、いくつかの段ボールが見えた。
「あ！」

桜子の目に、段ボールからはみ出すキラキラとしたものが映った。ブルーと銀のモールだ。間違いない。今年は大人のラグジュアリーなクリスマスをイメージして、モールの色もシックなものになっている。
「あれだよ、あれ！　ああ、よかった～。もう、どうしようかと思った！」
「でも、そこの箱が動かないんすよね」
「どれ？」
「それです」
瀬尾は、目当ての段ボールへの進路を塞ぐ五箱ほどの塊を指さす。
「動かないって……段ボールでしょ？　ほんとに時間ないんだから、真面目にやってよ」
桜子は積まれた段ボールの一つを両手で抱え――ようとして動きを止めた。まったく動かない。
（あれ？）
いくら重いといっても紙の箱に入る物の重さなど、たかが知れているはずだ。一体なにを入れればこれほど根を張ったように動かない段ボールができ上がるのか。だが、今はそんなことを考えている暇はない。
「じゃあ、私が向こうに行って瀬尾くんに渡す。で、受け取ったらすぐにフロアに運んでもらいたいの。時間ほんとにないから」
そう言いながら、桜子は段ボールの山に足をかけた。
その時――

「うわっ……」
瀬尾がなんとも情けない声を上げた。
「なに？」
振り向くと瀬尾は上を向いて固まっていた。その視線の先には、今まさに棚から落ちようとしている段ボールがあった。
「あ……！」
逃げる間もなく、段ボールが桜子に迫る。
「キャッ!!」
頭を抱えてギュッと目をつぶった――のを境に、桜子の意識は唐突に途切れた。

＊　＊　＊

神よ。
月の女神エテルナ様。
どうぞパンをお恵みください。
日がな一日リュートを奏でるばかりの息子のことは、もはや諦めました。
どうか、パンを――いえ、私のパンではございません。
私の力が及ばず、今日も飢えている南区の民に、どうかパンをお恵みください。

もう誰一人、死なせたくはないのです。
妻にも先立たれ、息子に背かれ、もはや生きる希望さえございません。この命と引き換えに――
――夢現に声が聞こえた。
「痛……」
桜子は、身体中に痛みを感じて目を覚ました。ちょうど、フローリングの上でうっかり寝てしまった時のような痛みだ。なぜこんな硬いところで寝てしまったのか……頭の中が、直前の記憶を辿るのに忙しい。
ゆっくりと目を開きながら、桜子は自分が置かれていた状況を思い出した。
「いけない……！　早く戻らないと！」
ラッピングの入れ替え作業開始時刻まで、残り五分しかない。ガバッと身体を起こした桜子だったが、目の前に広がる『あり得ない光景』に、しばし口を開けてしまった。
「え……？」
そこは、石造りの十二畳ほどの空間だった。床は美しく磨かれた白い大理石だ。こんなところに寝ていたのでは身体が痛くなるのも当然だろう。
だが問題は、もっと深刻かつ重大だった。
何度まばたきをしてみても、『大國本店の四階倉庫』には見えなかった。棚もなければ、雑然と積み重なった段ボールもない。

その上、桜子自身が着ている服も制服ではなかった。
「え!?」
桜子は己の身を包む、白い布でできた服を見つめた。『古代ローマの女性の服装』として博物館に展示されていそうなものだ。更に足元を見れば、革のサンダルをはいている。言うまでもなく平成生まれの桜子のワードローブにはない。
手で触りながら服装を確認する。どうやら下着も、桜子が奮発して買ったラインが出にくい一枚三千円のベージュのショーツではないようだ。
「ちょ……なに、これ」
上には透け感のある羽織ものと、ノースリーブのワンピースだ。
ハッとして、桜子は自分の身体を抱きしめるように身を屈めた。が、すぐにその腕を放す。
(よかった。今は『ない』んだった)
桜子は、胸を撫で下ろした。先週、エステサロンで脱毛の施術を受けていたので、今はちょうど人前で出しても問題ない状態だ。タイミングによっては常に腕で脇のあたりをガードしなければいけないところだった。
だが、ムダ毛の件で安心している場合ではない。そもそもここがどこで、なぜ自分がここにいるのか、桜子にはまったくわからないのだから。
「う……」
背の方からうめき声が聞こえた。上ばかり見ていて気づかなかったが、桜子の後ろに瀬尾が倒れている。桜子と同じく、まるでローマ人のような格好をしていた。
「あれ……槇田さん……」
身体を起こして桜子の方を見た瀬尾は、あろうことかプッと噴き出した。
「好きなんですね、『建国記』。それ、エテルナ様ですよね？　いやぁ、マニアックだなぁ。っていうか、槇田さんの年でコスプレってヤバくないですか？　ハタチまでででしょ、許容範囲」
桜子には瀬尾の言葉の半分は理解できなかった。だが、最後の二十文字程度で十分に意図は汲み取れた。腹を立てるには事足りる内容だ。
「そういう瀬尾くんだって、あり得ない格好してるんだけど」
瀬尾は自分と桜子を交互に見て、「サンタ……ではないですね」と言った。
「ここ、どこですか」
「わかんない」
改めて周囲を見て、桜子はこの部屋にはドアがないという恐ろしい事実に気がついた。ガラスの入っていない窓が壁をぐるりと囲んでいるが、手を伸ばしても届かないような高さにある。そして、はめ殺しの石の格子には、人が出入りできるだけの幅がなかった。
窓の向こうの空は明るく、ピーピピ、と鳥の声がする。少なくとも夜ではない。
「ちょっと待って……朝ってことは、ラッピングの入れ替え、もう終わったってことだよね……っていうか、今何時？　出勤――」
とっさに左手首を見るが、そこに腕時計はなかった。しかもバッグもなく、身分証もなければ財

布もスマホもない。髪を留めていたバナナクリップも、去年のボーナスで買ったダイヤのピアスさえもなくなっていた。自分の身に、尋常ならざる事態が起きていることだけは間違いないようだ。
桜子はひとまず大きく深呼吸をした。
「とりあえず、出口を探そう。ここを出ないと」
自分を励ますように言うと、まずはドアを探して壁を調べ始めた。だが、やはりドアはない。
部屋の中央には四角い台座があるが上になにが載っているわけでもなく、ボタンがあるわけでもなかった。藁にもすがる思いで押したり引いたりしてみたが、ピクリとも動かない。
桜子は壁をもう一度、念入りに調べる。すると茶室の扉ほどの大きさだけ色が違う石を発見した。床にも、石を擦ったらしい跡が残っている。
「ここ、動くのかも……」
石を押す。だが、動かない。取っ手もないので、引きようもない。
どうやら外から押す構造になっているようだ。つまり、この建物は外から入ることはできても、入り口を塞がれてしまえば、中から出ることはできないということになる。
じわりと額に汗が浮く。水も食糧もトイレもないこんな場所で、このまま閉じ込められ続けたら――という最悪な予感に、焦りがどんどん加速する。
とにかく、なんとしても外に出たい。桜子は高い場所にある窓を見上げた。
「そこの窓から助けを呼ぼう。ちょっと瀬尾くん。踏み台になってもらえる？」
「マジですか」

桜子があちこちを探す間、ぼんやりと突っ立っていただけの瀬尾が、不満を漏らす。
「だって、高さ足りないし。ちょっと待って。サンダル脱ぐから」
桜子は瀬尾の返事を待たずに、屈んで足元のサンダルを脱ぐべく編み上げの紐に手をかけた。くるぶしあたりにある革の紐が解きにくく、苦戦を強いられる。
（こんなサンダル、いつはかせられたんだろう）
今、桜子の身体を覆っているものは、すべての自分で身に着けた覚えのないものだ。下着の形状も、サンダルの脱ぎ方もわからなかった。何者かの仕業だとしても、意識のない人間にこれらのものを身に着けさせるのは簡単なことではないだろう。
誰が？　なんの目的で？　考えれば考えるほど、気味が悪い。
「……どうぞ」
しぶしぶ、といった様子で瀬尾は四つん這いになった。
桜子は、体重をかけたら折れそうなほど頼りない瀬尾の背に足を乗せた。しかし、窓まであと少し高さが足りない。
「……ダメ。見えない。届かない」
すぐに桜子は瀬尾の背から下りた。
「肩車しますか？　高くはなりますよ。あ、全然気にしないでください。俺、三次元無理なんで。上、どうぞ」
意味のわからないことを言う瀬尾をスルーして、桜子は考えた。

このもやしのような男に肩車をさせるくらいなら、自分が肩車した方がよいのではないか。桜子は細身ではあるが、身長は一六十センチを超えているので、瀬尾との身長差は恐らく十センチもない。体重もそれほど大きくは違わないはずだ。

だが、瀬尾の報告では、情報が九割カットされて届くことになるだろう。となると、やはり自分が上になるべきだ、と桜子は判断した。

「じゃあ、お願いします」

屈(かが)んだ瀬尾の肩に足をかける。プルプルと震えながら瀬尾が立ち上がる様(さま)は、生まれたてのヤギのようだ。

「おっと……やば……」

「うわ！」

フラフラする瀬尾の助けになるように窓の格子(こうし)にしがみつく。

「そ、それ……ちょっと楽です……」

腕の力で身体を少しだけ持ち上げると、やっと外の様子が見えた。

「なに……これ」

桜子はポカンと口を開けた。

そこに広がっていたのは、日本に存在するとは到底思えない光景だったからだ。

「パ、パルテノン神殿……？」

「は？　そんなの日本にあるわけないじゃないですか。意味わかりません。……って、もう限界で

す！　下ろしますよ！」
そうしてブルブルと震える瀬尾の肩から着地した桜子は、頭を抱えた。
太い石の柱、白亜の建物――
「まずい……まずいよ、ここ、なんか文化遺産とかそんな感じだよ、絶対！」
『文化遺産でコスプレ。若者の非常識に地域の怒り爆発』『ここまで堕ちた？　若者の倫理観』――
桜子の頭に、ネットニュースの見出しが過る。
先ほど桜子の目に映ったのは、大きく荘厳な神殿のような建物だった。背の低い灌木が生い茂る庭に、神秘的な泉がある、美しい光景だ。神殿の類でないとすれば、テーマパークか、結婚式場か、石油王の家か……それくらいしか考えられない。
「ここ、日本じゃないのかも……」
「は？」
「なんか犯罪に巻き込まれたとか……これ、拉致事件とかだったりしない？」
「銀座のど真ん中にあるデパートの倉庫から、わざわざ成人した人間を拉致ったりしますかね」
「でも……本当に、日本じゃないみたいなんだよ」
神殿のような建物は、窓から覗いただけでは全体を把握できないほど大きかった。地震の多い日本で、こんな巨大な石の建造物が存在し得るのだろうか。
もう一つ、桜子が気になっていることがある。気温だ。いくら北海道と比べて東京が暖かいといっても、十一月の半ばにノースリーブで外を歩けるほどではない。

「待ってくださいよ。日本じゃなかったら、一体どこだって言うんです？　神殿みたいな場所で、そのコスプレって……でき過ぎなんですけど」
「でき過ぎ？　なにが？」
「槇田さんのコスプレ、どう見ても『建国記』の――」
その時、鳥の鳴く声に交じって、人の声が聞こえてきたような気がした。
「……あれ？　せ、瀬尾くん、ちょっと静かに！　声が……！」
桜子は人さし指を口に当て、耳を澄ませた。気のせいではない。声は少しずつ大きくなっていく。
「本当です！　父上！　祭殿の中に女神様が！」
「バカも休み休み言え、ベキオ！　リュートの弾き過ぎで、いよいよ頭がイカれたのか！」
「黒い瞳を持つ黒髪の乙女です！　女神の化身に違いありません！」
桜子の耳に、はっきりと日本語が聞こえた。
（助かった……！）
「東区の貧民窟になら黒髪のゴロツキくらい、いくらでもいるだろ。ただの盗人だ。とはいえ、奴らも、まさか祭殿になにもねぇとは思ってなかったろうよ。命がけで忍び込んだってのに、気の毒なこった。肝心のご神体は売っぱらわれた後だったんだからな」
「ガルド。口を慎め！　だいたいあれは――」
「神官も女官も身内以外いねぇ神殿で見栄はんなって。おーい、盗賊ども、聞こえるか！」
声は三種類。三人とも男性のようだ。

「すみません！　私たちは盗賊ではありません！　大國本店の槇田桜子という者です！　警察に連絡させてください！」
ズズズズ……
重い音がして、石が押し出されてくる。
「出て来い」
太い男の声を聞き、桜子は急いで扉をくぐった。
出られた。助かった。すぐにでも電話を借りよう。
しかし――安堵に緩んだ桜子の顔は、目の前の鈍い光の前に強張った。刃物だ。――剣だ。
ペタン、と桜子は屈んだ格好のまま尻もちをついていた。
「え……え……!?」
「うわ……ッ」
後ろにいた瀬尾も、桜子と同じ格好で尻もちをついた。
桜子の目の前に立って、大きな剣を突きつけていたのは、ファンタジー映画かＲＰＧに出てきそうな風貌の、赤茶のヒゲを生やしたクマのような大男だった。
先ほどの会話は日本語で交わされていたのに、クマ男はまったく日本人には見えない。
「よりによって、このエテルナ神殿に盗みに入るとはいい度胸だ。だがこの剛腕のガルド様の身内を狙ったのが運の尽き――」
「剣を下ろせ！　ガルド!!」

大男の横にいた、五十代ほどの哲学者のような風貌の男が、クマ男を強い声で止める。こちらもやはり日本人には見えない。服装は、瀬尾が着ていたものとほとんど同じだ。
「あぁ……月の女神が……！　エテルナ様！　我が願いを聞き届けてくださいましたか！」
哲学者のような男は、叫ぶなり床に両膝をついて平伏した。その横にいた、オレンジがかった金髪の、ダビデ像に似た美青年も同じように膝をつく。
「ただの盗賊じゃねぇのか？」
――シャラン。
クマ男が剣を鞘に収めた音を聞いて、桜子はその剣が偽物ではないことを確信した。
冷や汗が背をつたう。
「ようこそ……ようこそおいでくださいました……！　皆、頭が高いぞ！」
哲学者のような男の声に、クマ男も渋々といった様子で膝をついた。桜子と瀬尾は、尻もちをついたまま唖然とする他ない。
この一団のリーダーらしい哲学者が、短い白髪交じりの亜麻色の頭を上げた。そして桜子に手を差し伸べ、身体を引き起こす。瀬尾はクマ男に起こしてもらっていた。
（これ、どういうこと？）
状況の呑み込めない桜子に構わず、哲学者は左胸に右手を当てて恭しく礼をした。
「エテルナ神殿の神官長ブラキオと申します。こちらは不肖の息子ベキオです」
ブラキオと名乗った男は、隣にいる美青年を示した。

「こちらは同じく不肖の弟ガルドです」
ブラキオの息子である美青年ベキオと、ブラキオの弟であるクマ男ガルドも、そろって胸に手を当てて礼をした。
「心から歓迎致します。エテルナの巫女様」
ブラキオはもう一度、歓迎の言葉を述べた。
桜子と瀬尾は互いの顔を見て「どういうこと?」「わかるわけないじゃないですか」と囁き声で言い合う。
石造りの建物に、日本人には見えない容姿で日本語を話す人々。まったくこの状況が理解できない桜子は、「電話をお借りできますか?」という言葉も発することができなかった。

ガルドはブラキオと二言三言交わした後、ズンズンと大股で帰っていった。ベキオはガルドより先にパルテノン神殿のような建物の方に走っていった。桜子の前を歩くのは、神官長のブラキオだ。
「さ、どうぞ、こちらへ」
ブラキオは、白いレンガの敷き詰められた道を先導する。ついて行くべきか一瞬迷ったが、ひとまず従うことにした。
エテルナ神殿の神官長――とブラキオは名乗っていた。ここは見た目の印象通り神殿らしい。しかし、桜子は『エテルナ』という神を知らない。神の名前ではなく、出雲大社のように地名を冠しているのかもしれないが、いかにアイヌ語が語源である北海道の難読地名に慣れた桜子でも、『エテルナ』という地名は聞いたことがなかった。
ブラキオに誘われ、二人は太い柱がそびえ立つ荘厳な神殿の中へと入っていく。
天井の高い、大きな空間が広がる建物だ。お香でも焚いているのか、ウッディな香りが漂ってくる。
神殿の中で左に曲がると、また外に出た。すると平屋になった石造りの建物が見えてくる。かなり分厚いガラス窓に、カーテンが掛かっている。そこが生活の場のようだ。
こぢんまりとした池のある中庭を囲む形で、棟が正面と左右に分かれている。それぞれの棟をつなぐ回廊の途中でブラキオは足を止めた。
――電話をお借りできますか? という言葉が喉まで出かかったが、桜子は結局口に出せなかった。あまりにも目の前の事柄が現実離れしていて、自分の『常識的な行動』の方が非常識に思えてならなかったからだ。
「こちらから先は、女宮になっております。あとは私の姪がお世話をさせていただきます」
ブラキオは骨ばった長い腕で左側の棟を示した。ここで、桜子と瀬尾はそれぞれ別の棟に案内されるということだろう。
「失礼致します」
左側の棟の扉が開き、ぺこりと礼をしてから亜麻色の髪の少女が出てきた。胸に手を当てて礼をする彼女の服装もやはりローマ風で、膝下丈のワンピースを着ている。
「ミリアでございます。どうぞなんなりとお申しつけくださいませ」

年の頃は中学生か高校生くらいだろうか。ミリアは緊張した面持ちで、しかし頬を紅潮させ、輝くスミレ色の瞳で桜子を見ている。そのまっすぐな敬意のこもった眼差しに、桜子は戸惑った。
「巫女様にお仕えできるとは、一生の誉でございます。どうぞ、ごゆるりとお過ごしくださいませ」
「ひ、人違い……されてませんでしょうか」
桜子は、北海道生まれ、東京在住のデパート勤務のＯＬであって、『巫女様』などではない。
こちらから詐称してはいないが、取り返しのつかないことになる前に、この誤解を解くべきだと思った。
「あの……私、大國デパート本店勤務の槇田桜子と申します。こっちは瀬尾で――」
ポン、とブラキオは手を打った。
「失礼致しました。貴きお方を俗名でお呼びするのは世の常。マキタ様に、セオ様、でございますね」
桜子の自己紹介も空しく、事態は更に悪化する。
「あの、違うんです。名前のことではなくて……その、ブラキオさんのおっしゃっている巫女というのと、私は別人で――」
ブラキオはゆっくりと首を横に振った。
「その艶やかな黒髪、その夜闇の色の瞳。それにそのお召し物。まさしくエテルナ様の化身でございます。エキュリオ様まで伴われ、伝承の通り祭殿の中から現れた貴女様が、エテルナの巫女でない理由がございませぬ。……よくぞ……よくぞ、この神殿へ……」
ブラキオは目元をグッと腕で拭うと、改めて「ようこそおいでくださいました、マキタ様」と言った。桜子を『エテルナ様の化身』と呼んだことから、エテルナというのは地名ではなく、神の名前だということがわかる。
「いえ、あの、私は……」
「ミリア、マキタ様はお疲れのご様子。食事の時間まで休んでいただくように」
「はい、ブラキオ様。さ、マキタ様。こちらへどうぞ」
「セオ様はこちらへどうぞ。男宮へご案内致します」
ミリアが桜子を女宮へ、ブラキオが瀬尾を男宮へと導く。
（どうしよう。これ、絶対ややこしいことになりそう）
ソワソワと落ち着かない気持ちのまま、桜子はミリアの後をついて行った。

ギギ……
扉を開けたミリアの先導で、女宮の中へと入る。廊下の両サイドは、ホテルのように木の扉が規則的に並んでいた。
「こちらが女宮になっております。以前はここもいっぱいだったのですが、今は――あ、いえ、失礼致しました。マキタ様にお使いいただくのはこちらの部屋になります。私の部屋はすぐ隣にございますので、なにかあればいつでもお呼びください」

ギギッという蝶番の鈍い音と共にドアが開いた。部屋は八畳程度の広さで、木のベッドと胸の高さほどの棚が二つ、あとは小さなテーブルセットと木のベンチがあるだけのシンプルな空間だ。

次第に桜子の鼓動が速くなり、握りしめた拳が汗ばんでくる。

「居住区の中央にございます奥宮には、厨や食堂がございます。お食事の際は食堂へお越しください。事務室や神官長の執務室も奥宮にございます。風呂は――」

ミリアが説明する声が、だんだん遠くなっていく。

コンセントがない。照明もない。どんなテーマパークにも、雰囲気を壊さないような工夫はしてあっても『非常口』くらいはあるはずだ。だが、桜子はこの神殿で一度もそれを見ていない。

だから桜子は、ここでも「電話をお借りできますか？」という言葉を口にできなかった。その質問にどんな答えが返ってくるのか、想像がつかない。

「……ありがとうございます。ミリアさん、ちょっとお願いがあるんだけど……」

桜子が尋ねようとすると、ミリアは困り顔を見せた。

「マキタ様。どうぞミリアとお呼びください。私は巫女様にお仕えする身でございます。そのように丁寧なお言葉、もったいのうございます」

もう桜子はこの場のルールに逆らう気力を失っていた。多少の抵抗はあったが、思い切って「ミリアちゃん」と呼びかける。

「ちょっと瀬尾くんの部屋を訪ねてもいいかな。少し話がしたいの」

ごく簡単な依頼のつもりだったが、ミリアは顔色を変えた。

「いけません！　男宮に女性が入ることなど、あってはなりません。常乙女たるエテルナ様の巫女様であれば尚更でございます！」

「わ、わかった。ごめん」

予想外の強い制止に、桜子はすぐに謝った。

「弟君とお会いになられることに問題はございません。奥宮でも中庭でもご自由にお使いください。男宮の内部と連絡を取る際には、入り口の鐘をお使いいただきます。今、ご案内致します」

「あの――」

桜子は、ドアに手をかけたミリアを呼び止めた。

電話のことはともかく、これだけは聞かねばならない。

忙しい呼吸を繰り返しながら、桜子は思い切ってある質問をした。

「『日本』って……わかる？」

ミリアは桜子を見つめて、まばたきを二度した。返事がくるまでのほんの数秒が、ひどく長い。

「ニホン……でございますか？」

聞き慣れない言葉を聞いた、というようにミリアは小さく首を傾げた。

――ぞわっと鳥肌が立つ。

「それは、マキタ様の故郷の――東方の言葉でしょうか？」

東方。極東。ヨーロッパ基準で言えば日本は東の果てにある。この日本ではないらしい欧米人風の人たちが、アジアを『東方』と呼ぶのは自然なことに思えた。日本自体は存在していても『日

本』という名で呼ばれていないのかもしれない。まだ、一縷の望みが残っている。
「ミリアちゃんは、私が、その……東方の人間だってわかるの？」
「エテルナの巫女様は、東方からいらっしゃるものと伝わっております。それに、そのお髪の色は東方の人々に多いので、私にもわかります。東区でダイヤンの商人を見たこともございます。あとは、東方の国といえば……オーウェン、ポヴァリ、ゼペル……」
ミリアは日本語を話しているのに、『東方の国々』の名前は、どれも桜子の知る世界の国名とは異なっていた。
――ここはどこ？
この世界を知れば知るほど、『ここは日本ではない』という証拠が固められていくようだ。ここまでくると、桜子の知る世界とは別の――『異なる世界』にいるのではないかとさえ思えてくる。
ミリアに案内され、桜子は女宮と左右対称に配された男宮の前に立つ。
「男宮にご用の際は、こちらの鐘を鳴らしてくださいませ」
キーン。
ミリアが細い鎖を揺らして、扉の横にあるシンプルな形の鐘を鳴らす。素朴なカウベルのような音を想像していたが、鐘の音は美しく澄んでいた。
カタ、と音がして、扉の覗き窓が開く。
「あぁ、マキタ様でございましたか」
明るい綺麗な青い瞳が見えた。ブラキオの息子のベキオのようだ。

「ベキオさん。セオ様をお呼びしてください」
ミリアが頼むと、カタ、と覗き窓が閉まった。
「マキタ様。では私は失礼致します。お食事の時間にお呼び致します」
丁寧に、胸に手を当て礼をしてから、ミリアは奥宮の方に向かっていった。
ギギ……
男宮の扉が開き、瀬尾が雑な会釈をして出てきた。
「瀬尾くん。そっちは大丈夫だった？」
「とりあえず無事です」
瀬尾は中庭の日かげになったベンチに腰を下ろした。
ローマ人のような服装でも、短髪で、のっぺりとした顔の瀬尾が着ると、ものぐさな修行僧のようにしか見えない。その猫背具合を見ていると、桜子はひどく不安になった。なぜ、ここにいるのが瀬尾なのか。せめて一緒にいるのが、五階フロアチーフの吉岡だったら――いや、七階フロア担当の三谷くらいの良識ある人ならば、桜子も少しは救われたはずだ。だが――瀬尾だ。この不運な巡り合わせを呪う言葉が、とめどなく胸に湧いてくる。
はぁ、と重いため息をつき、桜子は瀬尾から少し離れたところに腰を下ろした。
「そもそも『エテルナ様』ってなに？」
「月の女神ですよ」
桜子の質問に対し瀬尾は、簡単に答えた。

「エテルナなんて神様、聞いたことないんだけど。ギリシャ神話とかローマ神話……インドにも中国にも、日本の神話にも出てこないよね？」
「俺……知ってるんですよね」
なにを？　と聞くより先に、瀬尾が荘厳な神殿を見上げながら言った。
「この世界を」
突然スピリチュアルなことを言い出した瀬尾に、桜子は警戒心をむき出しにしてベンチの端まで移動した。そちら方面はどうにも苦手だ。
「――『塔のある翡翠色の瓦の王宮を囲む、石造りの美しい都』『七つの丘には七つの神殿があり、神々が祀られている』」
「……なにそれ」
瀬尾の言葉はスピリチュアルではなかったが、まったくもって意味不明だった。
「『建国記』……です。『ガシュアード王国建国記』」
「ごめん。なに言ってるかわかんない」
瀬尾は、眉間にシワを寄せた。その表情には覚えがある。桜子がこの四ヵ月、瀬尾に対して毎日のように見せていた『このバカにはどう説明したら通じるのか』という顔だ。
「『ガシュアード王国建国記』っていう、ファンタジー小説があるんです」
瀬尾は小さなため息の後で、説明を始めた。
「全一〇〇巻予定で始まって、ええと……最終的に一〇五巻までだったと思いますけど、とにかく

作者が死ぬまで年に五、六冊くらいの勢いでじゃんじゃん出てたんです。――その、世界観そのままなんですよ。ここ。エテルナってのは、その『建国記』に出てくる女神の名前です」
まったく話が読めない。だが、それは桜子を四ヵ月間イライラさせ続けた瀬尾のビミョーな言語能力のせいではないようだ。
「エテルナっていうのは、王都の七つの丘にある神殿に祀られている神様の一人なんです。たぶん、オリンポスの神々みたいな感じって言った方が、わかりやすいと思うんですけど……」
「ギリシャ神殿のアルテミスみたいな神様ってことでしょ？」
「そうです。そんな感じで、この世界で月の女神といえばエテルナなんです。物語の中でも活躍する、重要な女神で――ちなみに『建国記』は、のちに王となるヒーローが、神々の加護を受けて英雄たちを率い、この王都にあった前王朝を滅ぼして、ガシュアード王国を建てるっていう話です」
ファンタジー小説としては、特に突飛なストーリーではなさそうだ。突飛なのは、自分が今、そのファンタジーの世界にいるかのような状態に陥っていることの方だろう。
「つまりエテルナっていうのは、その小説の中にしか出てこない女神様ってこと……だよね？」
「そうです。だから今は、まるきり『建国記』の世界にいるみたいな感じなんです」
「ってことは……ここは、そのファンタジー小説のモデルになった国……ってこと？」
ファンタジー小説の中にいるようだ――などという言葉をそのまま呑み込めるほど桜子の頭はお花畑にはなっていない。だから、そう考えるのが一番自然な気がしたのだ。
「わかりません。でも、日本語がこんなに普通に使われている、日本以外の国なんてものがあるの

かって話ですよ」
神殿にいる欧米人にしか見えない人たちは、桜子たちの存在に気づく前から日本語で会話していた。『日本語を母国語にする日本以外の国』が、この地球上にあるとは思えない。万に一つあったとして、その存在を日本人が知らず、相手も日本のことを知らない、ということがこの二十一世紀にあり得るだろうか。
「私……さっき、ミリアちゃんに聞いてみたんだよね。『日本って知ってる？』って」
先ほどのやりとりを思い出し、桜子は自分の腕にできた鳥肌をさすった。
「『知らない』って言ってた。ジャパンとかリーベンとか、ジャポネとか、そういう単語の違いっていうレベルじゃない感じっていうか……」
「『日本なんて国を知らない』って、日本語で言ったんですよね？」
瀬尾の言葉に、桜子はうなずいた。
「それなのに、いきなり『エテルナの巫女』って……意味がわかんない。あのドアのない建物だって、好きで入ったわけじゃないし――あ、そうだ。そういえば瀬尾くん、私の格好見て、すぐに『エテルナ様のコスプレだ』って言ったよね？　なんでわかったの？」
ブラキオは桜子を『エテルナの巫女』であると判断した根拠に、祭殿から出てきたことの他、目と髪の色に加え、服装のことも挙げていた。しかし、瀬尾までが桜子の格好を『エテルナ様のコスプレ』と判断した理由は、さっぱりわからない。
「そのままだからですよ。挿絵に出てくるし、アニメ化もしてますから、『建国記』を知ってる人

なら、槇田さんの今の格好見て十人が十人同じこと言いますよ。『エテルナ様のコスプレだ』って」
桜子は『エテルナ様』を知らないし、その『建国記』という物語も知らないので、桜子が『エテルナ様のコスプレ』をする動機はない。
「へえ……そのエテルナって女神様の髪は黒かったの？」
「この世界……いや、少なくとも『建国記』の世界では黒髪は珍しいんです。主要キャラにもいましたけど、わざわざ『黒髪の』って二つ名がついてましたし」
「その、エキュリオだっけ？　その神様も黒髪なの？」
「はい。姉弟（きょうだい）です」
つまり、誰が見てもエテルナ様っぽい格好をした黒髪黒目の女と、同じく黒髪の男という実に紛（まぎ）らわしい風体の二人組が、伝承の通りにあの祭殿に現れた、ということになる。
「とりあえず、勘違いだってことは伝えないと……」
桜子を『エテルナの巫女』と呼んだブラキオの喜びようから、巫女はなにかを期待される存在のようだ。だが、桜子がその期待に応えられる見込みはまったくない。できるだけ早期に誤解を解くべきだろう。
だが――
「とりあえずいいんじゃないですか？　『エテルナです』『エキュリオです』って顔してれば」
瀬尾は他人事（ひとごと）のように言った。
「そういうわけにはいかないよ。人違いされてるんだし」

桜子は幾分のいら立ちを隠さず顔に出した。だが、瀬尾はまったく怯まずに続ける。
「路頭に迷うことになってもいいんですか？　俺はご免です。さっき、あのクマみたいな男に剣を突きつけられたの、忘れたんですか？　銃刀法がないとこにいるってことですよ。『日本なんて国を聞いたこともない』って言ってる人がいる国に、日本大使館なんてあると思います？　身分を証明できるものをなにも持ってない俺たちが、この神殿のご本尊みたいなもののあるとこに忍び込んでましたってことで、警察に突き出されたらどうなるか、わかったもんじゃないですよ。国が違えば刑法だって倫理観だって違う。死にたくないなら黙っててください」
瀬尾は桜子に反論の隙を与えずに喋り切った。
今、自分たちは文化も習慣も違うらしい――日本ではないどこかの国にいる、という可能性を考慮すれば、瀬尾の言うように今は事を荒立てるべきではないのかもしれない。
桜子は「わかった」とうなずいた。
そして改めて、辺りを見渡す。
白亜の神殿。石造りの建物。十一月半ばのはずなのに、カラリとして心地いい初夏のような風。高い空。突然変わった自分たちの格好。吹き替え映画のように日本語を話す、欧米人にしか見えない人たち。すべてに現実感がない。
だからといって、ファンタジー小説の中にいるなど、認められるものではなかった。
「その『ナントカ建国記』って書いたの日本人？」
「『ガシュアード王国建国記』です。作者は日本人ですよ。ヒロイックファンタジーなのに、キャラクターが『仏の顔も三度まで』って言ったって話題になってましたし」
見渡す限り、ロケーションに和風な要素は少しもない。
「ちょっとホトケサマ……って感じじゃないよねぇ」
瀬尾も「ですね」と相槌を打つ。
これは、いかに昨年の人事考課で『臨機応変な対応』でAプラスを獲得した桜子であっても、処理できる案件ではない。
（お腹空いた……）
桜子は、自分の腹に手を当てた。段ボールを探していたせいで、夕飯代わりの仕出し弁当を食べ損ねた。ふと横を見れば、瀬尾も腹のあたりに手を置いている。
「お腹空いたね」
「……ですね」
口にすると、なおさら空腹を感じてきた。人間生きていれば腹は減る。次第に頭の中が、今すぐに腹を満たしたいという欲求で埋め尽くされていく。
その時、パタパタと足音が聞こえてきた。桜子がパッと振り向くと、ミリアが中央の棟から出てきたところだった。
「失礼致します。お食事の用意が整いました。どうぞ食堂へお越しください」
「ありがとう！」と心からの感謝を伝え、ミリアの後ろについて奥宮に入る。
事務所や厨房の場所などを教えてもらいながら食堂に向かう間、桜子が心配したのは、『水をそ

のまま飲めるのだろうか』『この国の料理は日本人の口に合うだろうか』ということだった。幸い、独特なスパイスの香りなどは漂っていない。それどころか厨房の近くを通っても、なんの匂いもしないので、出てくる料理の想像がつかなかった。

食堂で席につくと、空腹を抱えた桜子の前にトレイが置かれた。ミリアが「ごゆっくりどうぞ」と言って下がっていくのを見送り、桜子はテーブルをはさんだ向こうに座る瀬尾の顔を見た。

「これ……ナン？」

「……に、見えますね」

トレイの上にある皿には、ナンが一枚載っていた。インドのカレー料理で出される、雫の形をしたものだ。他には厚いガラスのグラスに入った、ワインらしき飲み物がある。

（メインの料理が、後で出てきたりするのかな）

まさか、夕食がこのナン一枚だけで終わりということはないはずだ。きっとない。そう信じて桜子は空になった皿とグラスを前にして待っていたのだが――

「お食事はお済みですか？」

とミリアが入ってきた瞬間に、希望は打ち砕かれた。あのナンを、もっとよく噛んで食べるべきだったと心から悔やんだが、後の祭りだ。

部屋に戻った桜子は、空腹と心細さに涙しながら硬いベッドに入った。

――帰りたい。家に帰りたい。実家に帰りたい。母に会いたい。義父に会いたい。友人たちに会いたい。仕事に戻りたい。薄いシーツに、薄い蒲団。ナンだけの食事に、大嫌いな部下。人違いをされたままだという良心の呵責。未来への不安。

なにもかもが最悪だった。

次に目を覚ましたら、いつもの朝に戻っていればいい――という期待は裏切られ、桜子が朝になって目覚めた場所は、エテルナ神殿の女宮の真ん中にある、桜子に与えられた私室のベッドの上だ。

「おはようございます。マキタ様」

空腹のあまり、軽く立ちくらみがする。覚束ない足取りのまま、桜子は奥へと案内された。美しい白亜の神殿の奥では、水が湧き出す泉が、朝の光にキラキラと輝いている。しかしこの美しいロケーションも、空腹にすさんだ桜子の心には響かない。

「巫女様にはこちらで沐浴をしていただきます。お済みになりましたらお声がけください」

長椅子の上に、濡れた身体を拭くための布と、着替えらしきものが置かれている。

「ごめん。ちょっと……ええと、いろいろこちらの国の習慣とか、衣類の扱いがよくわからないの。教えてもらえるかな」

ミリアは、桜子に下着を含めた衣類の身につけ方を丁寧にレクチャーした。衣類はそれほど複雑な構造のものではないので、なんとか一人でも脱ぎ着できそうだ。

問題は、そこに用意されていたもう一着のエテルナの衣装だった。

「これ……神殿の制服なの？」

「神殿に伝わる、巫女様の装束でございます」
そんな伝統の衣装と同じデザインの服を着ていたならば、ブラキオが勘違いするのも当然だろう。
沐浴の後、桜子はやむを得ず用意された巫女装束を身につけた。今はまだいい。脇は処理済みでツルツルだからだ。しかし、ここでの滞在が長引いてしまった場合、非常に危険な状態になる。
（こんな格好させるなら、ちゃんと脱毛コース完了するまで待ってくれればいいのに！）
空腹で、気も短くなっている。腹の中でカミサマの類に悪態をつきながら、中庭に出た。

中庭には、瀬尾がいた。やはり空腹がこたえているのか、ベンチの上で猫背を更に丸くしている。
「なんでこんなことになってるんだろ……」
「わかんないです」
桜子は眉に深くシワを寄せて瀬尾を軽くにらんだ。
「だいたい、瀬尾くんはその『ナントカ建国物語』を読んだことがあるから、それなりに必然性があってここにいるのかもしれないけど……！」
「いや、そんなバカな話ないですよ。フツーに本屋に売ってる本ですよ？」
「少なくとも私は、そんな本のこと知らないもの」
まったくもって理不尽な状況にいら立ち、桜子は立ち上がって池のあたりをウロウロと歩き回った。
その目の端で、白い物が動いた。ブラキオだ。

（どうしたんだろう。なんかシリアスな雰囲気なんだけど……）
ブラキオは、桜子が自分の存在に気づいたことを察したようで、一度足を止めて会釈をした。
胸騒ぎがする。人違いに気づいたのだろうか。神殿から出て行け、と言われれば出て行く他はない。
本来、桜子たちは神殿と無縁の存在だ。
「申し訳ございません」
いきなりの謝罪に、ますます桜子は気が気ではなくなった。固唾を呑んで続きの言葉を待っていると、ブラキオは胸に手を当て深々と頭を下げた。
「女神様を崇め、巫女様をお守りすべき神官として、あるまじきことだと思っております。お許しを。恥を忍んでお報せ致します。――この神殿には、もう食糧がございません」
予想とはずいぶんと違う内容だ。桜子は瀬尾と顔を見合わせ、ブラキオの言葉の続きを待った。
「貴い巫女様のお食事もご用意できぬなど……真に申し訳ございませぬ！　明日には、明日には……」
ブラキオが膝をつく。桜子も慌てて膝をつき、ブラキオと目線を合わせた。
「こちらが勝手に押しかけてお世話になってるんです。どうか、謝らないでください」
「本来であれば、私どもが……」
ブラキオは言葉を止め、苦しげにギュッと目をつぶった。額には脂汗が浮いている。
「ブラキオさん……具合、お悪いんですか？」

桜子の言葉に、ブラキオは「大事ありません」と聞き取りにくい声で返す。そして立ち上がりかけた身体が、ぐらっと傾ぎ——どさりと倒れた。
「きゃああッ！　だ、誰か……！」
叫んだはいいが、誰か、と助けを求めたところで、そこにいるのが瀬尾である以上、なんの期待もできない。だが、今は道連れが瀬尾であるという運命を呪う間も惜しい。
「瀬尾くん！　ミリアちゃんとベキオくん呼んできて！」
「ど、どこにいるんですか」
桜子は瀬尾の危機感のない質問を無視して、ブラキオの様子を注意深く見た。呼吸は多少荒い程度で、鼓動も速いが規則的だ。とにかく顔色が悪いことが気にかかる。
（もしかして、貧血？）
今朝から自分が感じている軽い眩暈の感覚と、昨夜の食事を思い出す。
心から『巫女』を歓迎しているブラキオが、桜子たちにナン一枚だけの食事を提供して、自身がそれより豪華な食事を摂ったとは考えにくい。もしかすると、彼は空腹から立ちくらみを起こしたのではないか、と桜子は考えた。
「ブラキオ様！」
パタパタと慌ただしい足音が聞こえてきた。ミリアだ。
「申し訳ありません。マキタ様」
駆け寄ったミリアは、手慣れた動きでブラキオの状態を確認する。

「急に倒れたの。顔色もすごく悪くて……こういうこと、以前にもあった？」
眉をきゅっと寄せ、ミリアは首を横に振った。
「ご心配にはおよびません。ご迷惑をおかけしました。……ベキオさんを呼んできます。部屋にお運びしなければ」
ミリアは桜子から目をそらしたまま、パタパタと男宮の方へ走っていった。
キーン、とミリアの鳴らした鐘の音が聞こえてくる。だが、すぐにミリアは一人で戻ってきた。ベキオは近くにはいないようだ。
やむを得ず、男宮に入るのをためらうミリアと、危機感のない瀬尾の手を借りて、桜子はなんとかブラキオを部屋まで運んだ。
桜子は軽い眩暈を感じて壁に手を突く。横を見れば、ミリアが今にも倒れそうな様子でしゃがみこんでいた。「大丈夫？」と声をかけると「恐れ入ります。大丈夫です」と答えが返ってきた。ブラキオだけではない。ミリアも顔色が悪く、不健康なほどに痩せている。特に肘のあたりの骨の浮き具合は、息を呑むほどに痛々しかった。
「ミリアちゃん。ちょっと聞きにくいこと聞くけど……、ちゃんと食事してる？」
顔を上げたミリアの青い顔に戸惑いが浮かぶ。それでも桜子は「教えてほしいの」と言葉を重ねた。
「実は……」
ミリアは重い口で、昨夜の桜子たちに提供されたナンが、本来ブラキオ親子のその日初めての食

事になるはずだったと告げた。桜子と瀬尾にナンを譲り、自分たちは残りの一枚を分け合って食べたのだという。そして、すでに何日も一日一食の生活を続けているということも。
（そんな……）
「このような形で巫女様のお心を煩わせましたこと、深くお詫び申し上げます」
こんな事態になっても尚、ミリアは『エテルナの巫女』に謝罪していた。
ここで、桜子ははっきりと命の危機を認識した。そして、恐らくは自分より前に、ブラキオやベキオ、ミリアが、桜子に「申し訳ありません」と謝りながら飢えて死ぬ、とも思った。
バタン、バタン！
扉という扉を開けて、口に入れられるものがないか探した。厨房は広く、業務用サイズの鍋釜の類がたくさんある。木やガラスの食器も数が揃っている。だが――必死の捜索も空しく、見つけられた食糧はわずか一〇〇グラム程度の小麦粉と塩だけだった。
――このままでは、死ぬ。
今ここで自分が死ねば、桜子の母親は永遠に帰らない娘を待ち続けることになる。それだけは絶対に回避しなければならない。
厨房を出ていこうとする桜子に、ミリアが追いすがる。
「マキタ様、どちらへ⁉」
「とにかく食糧を手に入れないと。ブラキオさんをあのままにしておけない」
「お待ちください！　私が……きっと、なんとか致します。夜には……」

ミリアのスミレ色の瞳が、涙で潤んで揺れている。そして「なんとか致します」と繰り返し言い、ミリアは胸の前で手を組んで祈るような仕草をした。
「なんとかするって……ミリアちゃん、仕事してるの？」
「あ、あの……ただ、酒場で……いえ、あの……」
見たところ中学生ほどの年齢のミリアが、夜に酒場で働いていると聞いて桜子は眉をひそめた。その表情を、怒りと理解したのか、桜子を見るミリアの表情に怯えが走る。
「申し訳ございません！　常処女であられるエテルナ様にお仕えしながら……お許しください」
ミリアが何度か瞬きをすると、涙がポツポツと石の床で跳ねた。
「お許しください……父母を失い、私にはここしか居場所がございませんでした。ブラキオ様は命の恩人です。なにを失っても、ブラキオ様を支えることが、私にとっては……」
ミリアの言う『酒場で働いている』という意味を、桜子はわずかな時差を経て理解した。
常乙女の女神が、侍女の不貞に怒るという話はギリシャ神話にもある話だ。ならばミリアが桜子に許しを乞うて泣いている理由は、一つしかないだろう。
だが、桜子は、エテルナ様でもなければエテルナの巫女でもない。
飢えて倒れたブラキオを助けるために、ミリアがどれだけの覚悟をもってそういった行為で金銭を得たのか。そして今もまた、桜子たちのために繰り返そうとしているのか――それを思うと、目に涙が浮かぶ。だが、今は涙に意味などない。
「ミリアちゃんが謝らなきゃいけないことなんて、一つもない」

泣き崩れるミリアを置いて、桜子は廊下に出た。
（ベキオくんはなにやってたわけ⁉）
ズンズンと神殿の方へと向かう途中、リュートの音が耳に入った。音は神殿の向こうから聞こえてくる。桜子は音を辿って神殿の真ん中にある祭壇らしきものを迂回し、更に進んだ。
やがて、神殿の入り口のあたりに腰をかけ、リュートを弾いている美青年を見つける。
「ベキオくん！」
桜子は絵画のような光景に向かって声をかけた。今日のベキオはローマ風の格好ではなく、淡い水色のシャツに、腿のあたりで少し膨らんだ黒いボトムをはいていた。そういえばミリアも、朝に桜子の身支度を手伝った後は、普段着らしいワンピースに着替えていたので、ローマ風の服装は神殿の制服のようなものなのだろう。
「め、めが……いえ、マキタ様、いかがなさいました⁉」
ベキオは慌ててリュートを置き、胸に手を当てて頭を下げた。彫刻のように綺麗な姿をしているが、ベキオもひどく痩せていて顔色もよくない。
「ベキオくんって、仕事してるの？」
「いずれは吟遊詩人として諸国を旅したいと願っております」
ベキオは屈託ない笑顔で答えた。桜子は、この美しい青年を、ニートなバンドマンのようなものだと理解する。
「じゃあ、どうやって暮らしてるの？　スネかじり？」

立ち読みサンプルはここまで

『スネかじり』という単語は通じないだろうか、と他の言い回しを考えているうちに、ベキオが「はい」と答えた。どうやら通じたようだ。
「叔父の援助を受けております」
叔父というのは、いきなり桜子たちに剣を突きつけてきたクマ男のことだ。
「それで貴方は……なにをしているの？」
「リュートを爪弾いております」
ベキオは、リュートを大事そうに抱えて言う。
不意に、この神殿で目覚める前のことを思い出した。
明日のパンを。息子はもう駄目です。リュートばかり。女神様。――あれはベキオのことを嘆くブラキオの声ではなかったか。
ミリアの涙と、わずかな小麦粉と、瀬尾の阿呆面と、ブラキオの蒼白な顔が、桜子の頭の中を駆け巡る。
食糧がほしい。そのためにも、まずは金がほしい。金を稼ぐ目途など立っていないが、ここで座して死を待つ気はない。
「このベキオ、マキタ様に曲を捧げさせていただきます。貴女様の憂いが晴れるよう……」
リュートの弦が弾かれ、綺麗な和音が響く。頼んでもいないのに、オレンジ色の巻き髪の美青年は弾き語りを始めようとしていた。歌など聴いても腹の足しにはならない。だが――
「あ！」